



小説 089 タロー  
挿絵 黒澤清崇

立ち読み版

魔王を  
ラブ奴隷に  
してみませんか？

序章

我は魔王リスティアなり！

006

一章

我は——性奴隷!!

009

二章

わたし、魔王にならないといけないんです！

039

三章

わたしを——性奴隷にしてください……

070

四章

我は勇者のものなり！

110

五章

わたし……がんばります！

142

六章

わたしは……いやらしい女の子です……

168

終章

魔王は勇者のラブ奴隷ですっ♥

205

## 登場人物紹介

Characters



### リスティア・マト・ ティアマティ

鮮やかな赤色の髪と瞳、衣装から零れんばかりの巨乳がチャームポイントの美少女。絶大な魔力ゆえに魔界では畏怖されている。



### タルテ・アシュタロト

リスティアに仕える専属の美少女メイド。クールで頼りになる姉のような存在だが、主を思うあまり暴走することもある。

ゆう き いさむ

### 結城 敢

平凡な日常を送ってきた何の変哲もない温厚な少年。年頃の男子らしくエッチなことには興味津々。

カリに舌を這わせたままティアはくねくねと腰をくねらせた。掌で下腹部を押さえながら、桜色に火照った太腿を悩ましげに擦り合わせていく。

その様子は、まるでペニスを舐めているだけで感じてしまっているようだった。

「ティア……もしかして、気持ちいいの？」

躊躇いながら少年が訊ねると、少女は陶酔気味の表情で舌をチロチロと蠢かせた。

「はあ、はあ、だつてえ、い、敢のおちんちん、魔力、びくびくつて、お口の中にい……！」

『ふふ、そうだ。勇者の肉マラを舐めるのはどうしようもなく心地よからう』

からかうように先代は言うが、ティアの様子はまさにその通りで、ついにはヒップを小刻みに振つて、はあん……と甘ったるい鼻声を漏らした。

「んあ……ダ、メえ……アソコ、じゅんつてしちゃう……中、うずうずしてえ……！」

『それでよい。さあ리스ティアよ、存分に感じるがよい。それがそなたのためなのだ』

「は、はい……敢う……はむっ！　じゅるるるっ！」

「おっおおおおっティアあつ！　そんなつ、激しくう！」

頬を窄めて吸い付くほどの濃密な少女のフェラチオテクニクに、少年は堪らず背筋を仰け反らせてしまっていた。

（すっ、すごい！　あのティアが、こんなにいやらしいフェラしてくれるなんて！）

両手で少年の腰を捉えて巨大なカリを目いっぱい頬張り、柔らかいリップをエラ裏に張り付け頬裏でこすり唇でしごく。それもゆつたりではない、リズムカルだがスピーデ

イで頭を大きく前後させる動き。その熱烈な淫戯に少年の興奮と射精感は一気にレッドゾーンへと押し上げられた。

「んぐच्चゆるるるつつ！ はあーっ、はあーっ、ど、どおして？ 止まらない、お口とお腹、熱いの止まらないよお……！」

口端からポタポタと唾液を垂らしてティアは恍惚に打ち震えた。本当に気持ちよくなつていくのか、素足の太腿には愛蜜がタラタラと流れてしまつていた。

「んじゅっんじゅっじゅるるるるちゅぷっ！ い、いはむう、おいひ、おひんひん、お……おいひい、よお……お腹、しびれひやう……アソコ、じんじんしちゃうよお……！」

「ティア、ああそんなこと……くっ、僕もうっ！」

勢い付いていくフェラチオに誘われて少年の腰は自然と前後した。純情そうな素顔とのギャップに理性はいよいよ壊されていた。

——ぐぷぷっ！ じゅぷじゅぷぐっぷぐっぷ！

「んんん……！！ ふーっふーっ！ いはむ、いはむうっ、じゅるるるっ！」

「ああごめんティアっ！ 気持ちよくって、う、動いちゃうんだあ！」

喉に触れるほどカ리를突き出され少女は一気に咽せそうになる。が、興奮しきつた少年の身体はそのまま絶頂を目指さずにはいられない。

片や少女の身体も、牡の味と勇者の魔力で強く反応させられていた。全身をカクカクと波打たせながらお尻と尻尾を浅ましく揺すり、際どいハイレグラインの奥をびくっ！ び

くっ！ とわななさせる。顔を傾けてずるずると唾液を吸る仕草は、鳥肌が立つほど官能的なものだった。

「ふーっふーっ！ おいひい、おひんひんっ、んっんっじゅぶじゅぶっ！」

「あああっ先っちよ舐めてえ!? うはあ、よすぎるう！」

乳房を大きく弾ませながら魔王少女は夢中で刺激する。長い髪が大きく揺れて火照った頬から汗が散る。アゴが外れそうなほど巨大なカリを、しかし彼女はしっかりと咥え込み鈴口をにゆるにゆると舌先で舐めた。

これが本当に処女なのか。そう思わせるほどの妖艶なテクに、少年はこれ以上我慢などさせてもらえなかった。

「うおおっつくう！」

「んんんんんっつっ!!」

——びゅくびゅくっ！ びゅるびゅるびゅるるっ！

魔王少女の口の中に少年の精液がぶちまけられていた。

（ああひどいっ！ バージンの女の子にいきなり口内射精だなんて！）

快楽に全身を震わせながら敢はすぐに自己嫌悪する。童貞が初フェラでイクことなんて仕方ないように思えはするも、ピストンまでしてこの有様では本当に奴隷扱いのようだ。

もちろん彼に悪意などなく慌てて腰を引こうとする。が——唇を責められた処女魔王は、そのまま精液を必死に飲み下しビクビクと身体を痙攣させた。

「ごくっ、ごくっ……！ んふう……お、おいひ……いひやむの、しえ、しええきい……！」

「つつ！ ティア、あぁなんて……」

上手く喋れないながらも、確かに彼女は精液を美味だと言ってみせた。

しかもそれだけではない。少女の股布がじゅくっ、じゅくっ、と水音を立てて大量の愛蜜を内股に零す。少年に分かるはずはないが、彼女はこれだけでイってしまった。

「んく、あはぁ……すご、い……敢の魔力、お口に沁み込んで、アソコ、がぁぁ……」

残さず飲み干した処女魔王は、膝立ちを崩してその場に仰向けに倒れてしまった。

「はぁ、はぁ、あぁん……な、なに、これ……ニガいのに、お、美味し……お腹、じゅん、つてしちゃって……頭、痺れちゃって……」

肩で大きく息をしながら虚ろな眼差しでティアは言う。唇の端から精液を垂らしふくよかな臀部を痙攣させて、どこか被虐的なのにゾクゾクするほど淫靡だった。

（なんてエッチなんだ。僕が、僕のおちんちんがティアをこんなにしたんだ。もっとしたい。ティアをエッチにしてみたい……！）

このとき初めて、敢の中に彼女を自分色に染めたいという欲望が芽生えた。

魔力がどのと言っていたが、そんな自覚はまるでない。ただ、自分のペニスが彼女に火を着けていると思うだけで逸（は）る気持ちを抑えきれない。

「ティア、ば、僕……」

よくは分からないが、少女は感じてしまっただけでグッタリしている様子。その桜色の丸い肩

に少年は手を置いてそつと覆い被さった。

「あ……い、いさ、む……」

「ごめん、僕、もう止まらなく……だ、だめ、かな？」

訪れた瞬間に緊張を隠せず黒い瞳が切実に訴える。何をしたいのかは、むき出しのままのペニスの硬度がこの上なく物語っていた。

その、なおも淡く光るモノを見て処女魔王は喉を鳴らす。それは自分が生娘でなくなる予感。だが、ここに至つてなお相手を氣遣う彼に、少女は弱々しくも微笑みで答えた。

「……うん……お願い……わたしを、敢のものにして？　ちゃんと性奴隷に……」

「つつつ！　ティアつ！」

「ふあつ！　い、敢う——！」

もう我慢なんてできない。可愛い悲鳴をあげる彼女に敢は貪るようにキスしていた。

「んっ、あふう、んちゅ、あ、い、敢う、む、胸え……！」

よりグッチョリと濡れた唇に何度も吸い付き肌を触る。頬を撫で首筋を撫で、じつとりと汗ばんだ感触を経て豊満な胸元へ手を進める。

あ……と小さく声を出す魔王、そのV字カットの際どい胸元をゆつくりと下げる。

「あは、やあ……敢、恥ずか、し……」

「うわあ、ティアのおっぱいっ、すごい、大きい……！」

ぷるるんっ！　と大きく揺れた乳房に少年は間近で見惚れていた。



それはあまりにも特大なサイズで巨峰と呼ぶのすら生易しい。丸く膨らむ二つの果実は余裕でGカップ以上はあった。

おまけに意外と着痩せするのか、脱がすと余計に大きく感じられる。淡いピンクの大振りメロンのような丸みは、先端の小粒も可愛らしく、張りがあつてぷるんぷるんだった。

「ああステキだ、なんてステキなおっぱいなんだ。さ、触るよ、ティアッ」

「い、敢う、また、そんなコトっ——はああ!」

——むにゆうっ! むにゆ、たぶ、むにゆるんっ!

少年の両手が同時に伸びて二つの果実をまとめて捉えた。片手では掴みきれない柔肉をもつちりと念入りに、しかし丁寧に優しく、隅の隅まで確かめるように掌全体で撫で回していく。

処女なティアは当然戸惑っただろう。跨がるようにして乳房を揉むなんて、ちょっとレイプっぽくもある。けれど——。

「はあ、はあ、んあ……い、敢、わたしの胸、好きに……なってくれる?」

魔王少女は甘い吐息と共ににはかんで、どこか嬉しそうに胸を突き出すようにした。

「好きなんてもんじゃないよ。最高だ。こんなに暖かくて柔らかい……!」

感じているのか乳首もちよつと硬くなっていて男心に自信を与える。敢はそつと頬を寄せて、キスしていい? と囁く。ティアがコクンと頷くと、唇ではなく、軽く勃起した桃色突起に情熱的なキスをしていた。

「あはあつ!! あつあつ! そんな、そこになんて——くあああんっ!!」

「ああティア、乳首甘いつ! 汗の味、すごくいいつ!」

ビクンッ! と腰が跳ねる様子がまた堪らなく欲情を誘った。感じやすい体質なのか、少女はすぐに息を荒らげて乳肉をふるふると揺すって悶える。

「はああ敢、敢う、ああ——つつああああんっダメそこおつ!!」

——ふにつ、くちゆくちゅつ。

少年の指が内股に忍び込み処女の肉土手を軽くつついた。途端、すでに湿り気を帯びていたワレメがぷしゅつ! と熱い潮を噴いた。

「はあつ、はあつ、ダ、メえ……ひくつ、そこはあ、痺れちゃうよお……!」

ハラハラと涙を零しながらティアは力なく訴えてくる。愛撫としてはまだまだだったが彼が来る前から身体の準備は整っていて、敏感になりすぎた若い神経は軽い刺激でもイッてしまうほどだった。

「ティア、すごい……なんてエッチな身体なんだ……」

『ふふ、素晴らしい娘ではないか、こうも容易くイクとは。これで魔力漲る勇者のモノに処女膜を破られればどうなることやら。さあ敢よ、夜もまだであるしそろそろ刻み込むがよい。お前のそのデカイマラで未来の魔王を支配するのだ』

素敵な女体に感動していると先代が本番を促してくる。

(ぼ、僕が、ついにティアのバージンを……)

覚悟して求めたつもりだったが今になって少し怖気づく。したいものは当然したい。けれど童貞特有の足踏みもあるし、本当にこれでいいのかという迷いも消えてはいなかった。そんな少年に、感じまくってグツタリした処女な魔王が微笑んでくれる。

「……いいよ。わ、わたしのバージン……敢になら、奪ってほしい……」

仰向けのまま腰を上げると、ティアは何と、ぐつしよりと濡れたハイレグ股布を自分でおずおずと横にずらした。

——スス……ぴらっ……。

「つつつ……!! ほっ……ほらあ、見て……わつ、わたしの、い、いっ……いやらしい、アソコ……っ!」

「ティっ、ティア、そんなことっ!」

『ほほう、どこで覚えたか知らぬが、なかなかの挑発ではないか』

陰部を差し出すような仕草に先代は感心し少年は唾然となる。それは彼女がDVDで見た女の挑発行為だった。

男を知らぬ若い乙女にはあまりに酷なものでもある。事実ティアは、開いた両足と閉じたマブタを細かく震わせて羞恥に打ちのめされていた。

「つつ、お、おねが、い……ううっ、敢のおちんちんで、わ、わたしを……っ」

唇を噛み眉根を寄せて、新たな涙を流しながら必死になって誘う彼女、その健気な努力と可憐な表情が少年の躊躇いを一瞬でなぎ払う。

(ティア、あんなに恥ずかしそうにして……がんばってくれてるんだ。性奴隷だからって。ここまでされて引いてちゃ男が廃<sup>すた</sup>る！)

目の前で待つの、雪のような白さの肉土手にほんの少しの淡い恥毛、そして蜜がタツブリ滴るトロトロに濡れたサーモンピンクの薄い溝。

そのピュアさとエロさの混同した美しくも悩ましい花卉に、少年は巨根をそつと添える。

「あ……い、いさ、む……」

「ティア、可愛すぎるよ。僕もう入れなきや耐えられない。エッチ……しちゃうね？」

「ああつ、敢……！」

誘惑に微笑みで答えられて少女のハートもきゅんと高鳴る。豊かなヒップをそつと掴んでゆつくりと粘膜を割られていけば、いよいよ女にされる予感で蜜がさらに溢れて落ちた。

「あ、あああ……！ い、敢の、おつ、おつきいっ……！」

処女膣にぬぷつとカリが入ると魔王少女はハフハフと喘ぐ。くびれがゆつくりと振れていて、今なお光る彼の勃起にすぐにも気持ちよくされていくかのよう。

「はあああ、や、やだ、敢う、わた、わたしっ、またなにか、キチャいそおでえ……！」

「ティア、もうちよつと、で……んんっ！」

——ぷつっ！ ずちゅるるるっ！

「つっっはああああああつっ!!」

膣内にあつた柔らかな弾力が光る亀頭に突破された。勢い余った硬い勃起はそのまま深

部まで一気に埋まる。魔王の清いバージンがついに彼に捧げられたのだ。

途端、仰け反り気味だった少女のラビアがぷしゃっ！ と再び潮を噴く。

「ティ、ティアっ？ だ、大丈夫？」

突然のことに敢は慌てて彼女を覗き込む。破瓜直後ののだ、苦痛を感じていると思った。けれどティアは、背筋をグッと反らしたまま目を丸くして硬直していた。

「かはあ——あ、あっ……す、ご……きもち、いい……！」

「え？ えっ？」

『ほう、これはまた……処女膜貫通でイけるとは実に見所のある性奴隷だ』

先代が言うように、ティアは全身をビクビクさせながら熱い吐息を漏らしている。舌は少し唇から溢れ、細い喉元はしゃくりあげるようになっていいる。処女を失った狭い膣内は、きゅん！ きゅん！ と何度もヒクついてどこか気持ちよさそうだった。

信じ難いことだが、ティアはロストバージンでイってしまったようだった。

「つつ……はあっ、はあっ、はあっ……なに、これえ……アソコの中、じんじんして、ひゃんっ！ すごいの、キちゃって……」

そういうティアの眼差しは、本当に絶頂直後のようにトロントロンに蕩けている。小鼻はヒクつき肩は痙攣、細いくびれはゆったりとくねって勃起感触を味わうみたい。尻尾はゆらゆらと揺らめいていて高揚感をあらわにしていた。

しかも——。

「ティア、う、動いて、いい？」

「えっ？ あ、ダメ待つて！ 今動いちゃ——あふゆううんつつ!!」

——びくびくびくっ！ ふしゃあっ！

少し勃起を引いただけでティアはまたも潮を噴いた。一筋流れた破瓜の鮮血もあつという間に見えなくなっていた。

「ティア……すごい敏感なんだね？ バージンなのに二連続でイっちゃって」

「はあ、はあ、わ、分かんない……こんなの、こんな気持ちいいの、初めて、でえ……！」

半眼になった色っぽい眼差しで全身をワナワナと震わせるティア。

もう間違いない、彼女は破瓜でイけるほどの超敏感でエッチなボディなのだ。

（すごい！ これって魔族だから？ 魔王だから？ ううん違う、きつとティアだからだ。それにこのおま○こ、きつゝゝ気持ちいい……!）

エッチなボディの敏感腔内は、これまた極上の感触だった。繊細すぎるほど細かいヒダヒダが暖かな粘膜にびつしりと広がり、どこにも隙間を感じさせないほど勃起にびつたりと吸い付いてくる。濡れた媚肉は柔らかくって蕩けそうなほど気持ちよく、刺激的すぎるツブツブたちも緩やかに蠢いて愛撫してくれた。

（嬉しい！ 気持ちいいの僕だけじゃないんだ。ちゃんとティアも感じてくれる!）

童貞の悩みが解消されたことで敢の勃起にも力が入った。少しだけ自信を得た少年は彼女のヒップを両手で抱え込むと、射精感を我慢しながらゆっくりと腰を振り始めていた。



（そうか。僕をこっそり誘惑してティアを諦めさせようと。なのにバレちゃったから今度は僕を浮気者に仕立て上げようって）

意外と安直な発想だったが腑に落ちた心地だった。真面目そうな人だ、たとえば自分を犠牲にしてもティアを助けたいのだろう。

そう考えると嫌いにはなれず、何とか話し合いで解決できないかと思う。

と同時に、ふとある考えが頭の中に閃いていた。

『ダメ敢、お、お願い、エッチな気持ち、もうちよつと待って。わたしが行くまで……！』  
「……さあ、がんばってティア。僕がタルテさんと……エッチしちゃう前に帰ってきて？」

『そ、そんなっ、敢っ？』

ティアは困惑し切なげな眼差しで水晶越しにこちらを見てくる。趣向は変わっても趣旨は同じだ、ちよつとやりすぎな感はあるが、可愛い魔王の嫉妬心と性欲を刺激するには効果的そうだ。

「がんばってティア。早くしないと僕、タルテさんのお口でイっちゃいそう」

そう言うど敢は抵抗する素振りをやめて、ソファに座ったまま大開脚し美人メイドに身を任せた。

「……タルテさん、お願いします。僕のこと、も、もつと……」

「えっ？ は、はい……や、やはり、いやらしい男。ティア様を前にして堂々とほかの女に手を出すなんて」



敢の急な態度の変化にタルテは戸惑った様子だった。

「いいですわ、せいぜい骨抜きにしてあげます。ティア様を忘れられるように……」

気を取り直すと、サオをしごいたその手が離れてシャツを下から捲り上げて、両手で乳首をくりくりと転がしてきた。

「ああそんな、ち、乳首触りながらフェラなんて……」

「はむっ、ずずっ……ふふ、感じるでしょう？ これでもメイドの端くれ、男を悦ばす心得程度は持ち合わせておりますから」

どうやらタルテはセックスの知識が豊富らしく、その技は実に巧みで気持ちいい。指腹で乳首を刺激されながらじゅぶじゅぶとカリをしゃぶられていくと、みるみるうちに性感が高まりサオの脈動が速くなっていく。

『ああダメえ！ 待って敢、タルテ、そんなに表面ペろろされたら、わ、わたし……！』

映像の向こうでティアははっきりと身悶えていた。街中だというのに陰部を押さえ、どこか被虐的な表情を浮かべてくびれをくねくねと回し始める。まるでオナニーを始めたような珍妙な様子のメイド姿に、道行く人たちは強い興味の視線を投げかけた。

『おい、どうしたんだあの子？ メイド服なんか着て喘いじゃって』

『すげえ可愛いけどなんかエロいな。感じてみたい顔してるぞ』

特に男たちは、彼女の淫靡な気配に目を奪われていた。それくらいはつきり彼女は感じてしまっていた。

『はあ、はあ、だ、ダメ、見ないでえ……わたし、みんなの前でこんな……んはあんっ!』タルテが鈴口に舌先を入れてクチュクチュと中をかき回す。途端に勃起はビクツと跳ね上がりティアのおとがいが大きく反れた。

「ああそれすごいっ! はあ、はあ、ティア急いで、このままじゃ僕……」

『ふーっ、ふーっ、い、敢……待ってて、わたし、帰るからあ……敢のために、エッチ、してあげるからあ……っ』

よろめく両足を叱咤しながら彼女は歩みを再開させる。その涙の溜まった赤い瞳は、恋しい主人との激しいセックスをはつきりと切望していた。

(ああ、ティアの顔、蕩けちゃっていいやらしい。欲しそうな顔して僕のところ……!) 遠隔操作で少女を感じさせ公衆の面前で羞恥心を煽り、その上で自分を求めるよう仕向ける。何だかムゴい気はするが、自分への愛欲を強めるためなら男心はくすぐられた。

(あんなに初心だったティアが、どんどんエッチになっていく。僕の、僕だけの可愛い性奴隷に……)

若く美しい魔王を恋人以上の存在にできる、そんな期待感が敢を大胆にさせていた。

「んく……はあ、しかしティア様、一体どうなって……なぜ、あんな仕草を?」

「……それはタルテさんのせいだよ。僕が感じちゃうとティアも感じちゃうんだ」

「えっ? そ、そんな馬鹿な話が——あっ?」

不意に少年は身を起こし、跪く美女の前で仁王立ちとなっていた。

少し驚いた様子の彼女に自分から勃起ペニスを差し出す。

「……もつと舐めてタルテさん。ティアよりずっと上手なんでしょ？ ティアは最高にエッチで今のタルテさんより気持ちよくしてくれたよ」

「！ い、言いますわね。いいでしょう、大人の女の本気を見せてあげますわ」  
美女の黒い瞳に対抗意識の静かな炎が宿った気がした。

別にティアに勝ちたいわけではないだろう。しかし負けては意味がない。美女は再びカリを咥えつつ、今度は睾丸を両手でやんわりと揉みしだき始めた。

「んむっじゅずるっ。ふふ、いかがです、気持ちよさそうに転がっていますよ？」

「うう……まだまだ。ティアはお尻まで舐めてくれましたよ。それに比べればこのくらい」  
「！ で、でしたら……」

続いて唇はカリを離れ、サオを横から咥えたと左右にぴちやぴちやと舌で舐めた。

「れる、くちゅ……お、大きい……なんて、熱い……ふふ、いかがです？ 脈打っている血管を、ほら、一つ一つ丁寧に……舌でゆっくりと……」

少年は思わずくっ、と呻いた。妖艶な愛撫は、正直に言って凄く気持ちよかった。

それはティアが身をもつて証明してくれている。

『ふうんっ!? あふ……やあ、ねっとりしてるのが、這い回りたいに……んふう!』  
軽く足をもつれさせて少女は転びそうになっていた。スカートの奥からパタタッ、と水滴が落ちる。どうやらパンティは蜜でぐっしりのようだった。

それでも震える両足を進めて必死に平静を装い続ける。点々と続く愛蜜の跡に人々の視線はさらに集まるが、メイド姿の可愛い少女は少年のために全力を尽くしていた。

「ティア、あとは魚を買ってきて終わりだよ。がんばって。ちゃんと買い物して、僕の最高の性奴隷なことを証明してみせて？」

『はぁ、はぁ、うん、がんばるっ。見てて敢、わたし……やるから。敢のために、大好きな敢のために……っ』

見るからに火照ったその表情には、けれど決意のようなものがある。彼女の中で少年がいかに大きな存在であるのかという証拠だった。

そして——もう一人の女性の中でも少年の存在は大きくなり始めていた。

「ちゅぷ、くふう……！ はぁ、どういうこと？ 本当にティア様まで感じておられるように……それに……なんなの、この感覚？ ああ舌が焼けるように、あ、熱くう……」

いつの間にか、クールな美貌の魔族メイドまで吐息を熱くして戸惑っていた。

「ま、魔力を、感じる……舌に沁み込んできて、び、鼻腔まで、おかしく……それにこの男根、なんだか輝いているみたい……？」

「感じるんですねタルテさん？ そうなんです、これが勇者の力——らしいです。エッチした人を感じ支配して快楽を共有させちゃうらしいです」

「そんなんっ!? ではまさか、わたくしの行為がティア様を？」

敢が知るはずはないが、風呂場の二人を覗いたタルテは感覚支配の話を聞き逃していた。

目の前の光景に動揺しそれどころではなかったのである。

対して敢には目算があった。実は意識して感覚支配を行おうとしていた。

（タルテさん、いやらしい顔になってる。上手くいってるんだ、できるかどうか自信なかったけど）

ティアとのセックスの賜物なのか、最初は無自覚だったものが今では多少なりと自覚できるようになっていた。初めティアにフェラチオしてもらったとき、それらしい効果は現れていたため、意識すれば同じことができるかと読んだのだ。

「そんな、そのような魔力が存在するなど……ああ……このにおい、なんて刺激的な……こ、子袋が、勝手に発情してえ……」

果たしてそれは上手くいった。真相を知ってなお、タルテは唇をヌラヌラと輝かせ物欲しそうに巨根を見つめる。

「だめ、わたくしまで支配されるなど……くつ、謀<sup>はか</sup>つたな敢、最初からそのつもりで……」  
「違うよ！ 誘ってきたのはタルテさんじゃないですか。それに……分かってほしいんです。僕がティアのこと本気だったこと」

この人は悪い人じゃない、必ず分かってもらえる——そう確信して敢は真摯に訴えた。

「ティアが本気でいやがることなんて絶対しない。させない。でもティアは魔王である前にまず女の子なんだ。肩肘張らなくていいよう、僕が傍にいてあげたい。素直なままの彼女でいてほしい……」

「っ！ あ……あなたは……」

少し潤んでいた美女の瞳が動揺に大きく揺れていた。クールな美貌に隙間ができて本音が垣間見えたような感じ。それを見て敢は、やっぱり本当はいい人なんだと思った。

（きっとティアを助けたい一心で無茶したんだ。ちよつと思ひ込みが激しいだけで優しい人だと思う。そういえばティア、タルテさんは特別みたいに言ってたし）

青い髪をそつと梳くと、美女はあつ……と声を漏らした。

「お願いです。あなたみたいなステキな人を嫌いになりたくないんです。もし僕がほんとに酷いことするときには好きにしちゃっていいですから」

「くっ……ああ、この状況で優しい言葉など、なんと卑怯……女心を揺さぶるなんて……」  
「え？ いや、そんなつもりじゃ……あつ？」

——くちゅつ、ずるるるっ……！

一瞬キョトンとした少年は、次の瞬間には腰が引けてしまっていた。

美女が再びカリを啜えてネットリとしたフェラチオを続行したのだ。

（どっ、どうしたんだタルテさん？ あ、そうか、感覚支配で欲しくなっちゃって……）  
途中から説得する気になつて忘れていた。結局は善良なのだ、強引に支配なんて性格的に無理だった。

だが発情で緩んだ女心を刺激されたタルテは、本能の暴走を抑えきれなくなっていた。  
「じゅずつ、じゅずつ……っ！ はあはあ、な、なんという男根、こんなに……お、美味

しい……だめ、感覚が、快樂が、これにい……」

抵抗意識の弱まった表情はみるうちに蕩けていく。さつきとは違う、少し切なげな雰囲気、女性らしい柔らかな色気が出ていた。

「くっ、このような力に支配されてティア様は……はむっ、うふう……舌、痺れそう……！」

「ご、ごめんなさい。ティアのはワザとじゃないんです」

「……では、わたくしはその気だった、と？ くっ、い、いやらしい男……ちゅううっ！  
ずるずるっ！」

「あああつタルテさんっつ！」

鈴口を思い切り吸引されて敢は堪らず仰け反った。本気になったタルテのフェラはテクより情熱が前に出ていて、最初よりも間違ひなく気持ちよかった。

『んふううっ！ あふうっ、い、敢うう……っ！』

そしてティアもまた、勃起神経の昂りを味わい我慢の限界が近づいていた。

『はあーっ、はあーっ……！ ダメえ敢う、なにこれっ、熱いのじゅうって吸われちゃう……！ ああタルテ、え、えつちな顔で、い、敢をお……！』

少年がいよいよ堪らなくなつてティアも快感に腰が砕ける。同時に、同じ女としてタルテの変化を鋭敏に感じ取っていた。

「はあ、あああ、ティア様、申しわけ……わたくしも、この男にい……」

水晶に向かってタルテは詫びたが切れ長の瞳はすでに熱く潤んでいた。本気で美味そう

にカ리를頼張り左右にくちゃくちゃと振って味わい、跪く両足を大きく開いて濡れたパンティまでなぞってみせた。

「タルテさん、フェラチオしながらオナニーだなんて、エロすぎて僕っ、ああ……！」  
「支配しておいて、あんっ！ そんなこと……！」

熱いフェラと浅ましい姿に一気に射精感が高められる。オナニー経験もしつかりあるのか指先は淫らに肉土手を擦り、濡れて浮き出た淫唇を布地ごとツプツプつついていた。

『はあーっはあーっダメえキちゃうう、熱いのキちゃううっ……お願い待って、あとちよとだからあ……！』

『はいお嬢ちゃん、カレイ二匹だったね。って、おいおい大丈夫かい？ 顔真っ赤だよ』

『だい、じょうぶです……ありがとう、ごさいます、ごめんなさい、わたし急いで……！』

真面目なティアは最後まできちんと店を回り、買い物を終えてやっと帰宅の途についたが、可愛い顔はすでに蕩け始めていて、誰が見てもエッチな雰囲気丸出したった。

『はあ、はあ、敢う、わたしい……き、キちゃうう……おま○こじゅくじゅくするの……恥ずかしいお汁、止まらないのお……』

今にもイキそうな霞んだ眼差しでティアは歩く。もはや取り繕うこともできず、敢のペニスがビクつくたびにあんっ！ と鳴いて身をくねらせた。

よろよろと進むその姿は、常に内股になってしまっでまるで尿意をこらえるかのよう。メイド服の豊かな胸元は荒い呼吸で揺れ動いて艶めかしい。





くれていると思うと、少年は改めて愛しさを覚えずにいられなかった。

「あ……敢、おちんちん、熱くなつて……おま〇こ、うずうずしてきちゃった……」

感覚支配でティアはすぐに興奮に気付いた。

「あ、ごめん。その……今、いい？」

「……うん。敢のラブ奴隷だもん。敢のしたいときが、わたしのしたいときだもん……」

恥ずかしそうに俯いて、彼女はコクンと領いてくれる。初々しい仕草の中には期待に満ちた色香があつて、敢をドキッとさせていた。

「あ、待ちなさい！ まったく、あなたという人は……わたくしを差し置いて楽しもうというのですか？ 許しませんよそのようなこと」

背後からはタルテが重なり首筋に甘やかな吐息がかかる。魔法の青い炎が照らす石作りの広い部屋で、三人は交わることを決めた。

「敢……好き。大好き……」

「僕のほうがもっと好きだよ、ティア……ちゅっ」

見つめ合つてまずはキス。女の子というのはキスが好きで、ティアもその例に漏れず舌を入れると嬉しそうに唇を開いてくれる。

「ん、あふ、くちゅる……敢のキス、大好き……これだけでお腹、暖かくなっちゃう……」  
「濡れやすいんだね？ いいよ、いっぱい濡れて。びしょびしょになったティアのおま〇こ、大好きなんだ」

「敢つ、わ、わたくし、も……んっ？ んむう！」

後ろからのメイドのおねだりは少し強めのキスで黙らせる。丸くなった切れ長の瞳は、舌を押し込み歯茎をにゅるにゅると舐めていくと脱力するように垂れ下がっていった。

「あむっ、じゅづるる……はああ、ら、乱暴……こんなやり方まで知ってしまったて……！」  
身動きし戸惑う姿を見て、敢は改めて確信した。タルテはお姉さんぶっている分、ガードをこじ開けるちよっぴり強引なやり方が好みらしい。また、メイドなためか氣遣われることに不慣れなようで、軽くよろけたところをさつと腰を抱いてあげると、面白いくらいにオロオロしてみせた。

「あ……と、年下のくせに男ぶるのはおやめなさい！ まったく、これでもわたくしは年上で……な、なにがおかしいのです!? そ、そういう笑顔は、およしなさい、と……」

こうやって優位に立ちたがるくせに本当はリードに弱いところが、余計に少年には可愛らしく見えていた。

「敢……おちんちん、すっごくほしくなってるね？ わたしもおま○こ、ほ、欲しく、なってきちゃった……」

キスの感触と感覚支配によって、ティアは早くもモゾモゾと内股を擦り合わせ始めた。

「うん、欲しくなってきた。いいかな、ティア？」

「待って敢。今日は特別なコト、してあげたいの」

服に指をかけようとすると、彼女は制してそっと指で唇に触れる。

少年は少女に手を引かれて絨毯に沿って奥へと向かい、中世チックなデザインの立派な魔王の玉座に来る。

目を瞬かせる彼は、そのまま玉座に座らせてもらっていた。

「ティア、これって……」

「いいの。だって魔王リスティアは敢のものなんだもん。ここに座っちゃっていい人なんだって分かってほしいの」

これは結構驚きだった。いくら敢でも、魔王でない人がここに座るのは不敬なことくらいは想像がつく。

魔王本人がOKしているのだから無茶な話にはならないだろうが、自分がとんでもない地位の人を愛し支配しているのだと感じた。

「まったくティア様は……光栄に思いなさい敢、魔王様以外がその座に着いたら本来は即刻八つ裂きにされるのですよ？」

「あわわごめんなさいタルテさん！ でもさすが玉座だね、ふかふかで座り心地いい」  
「くす。よかった、喜んでもらえて」

ニコリと笑顔を浮かべるティアは、けれどすぐに頬を染めて、どこかつやのある誘惑的な眼差しになる。

「じゃあ……ここでいっぱいしてあげるね？」

「あつ……ティア、ズボンを……あ、シャツまで……」

玉座に座る少年の衣服が少女にゆつくりと奪われていった。ズボンを下ろされシャツを脱がされ、尻を浮かせてパンツまで取られると、一糸纏わぬ全裸にされてしまっていた。

（す、すごいシチュエーション！　っていうか裸の王様？　恥ずかしいけど、でも……）

椅子が立派なぶん何となく心もとなく感じるものの、目の前には二人の若く美しい女性跪いていて、なぜだか物凄く優越感を覚えていた。

むき出しのペニスをそそり立たせて玉座で足を開く姿は、まるで王が女中に奉仕を要求しているかのよう。ティアがマントを外し際どい衣装の胸元に手をかけると、期待と興奮にペニスは一層硬度を上げた。

——ばわっ、ぶるるるんっ！

「おお……ティアのおっぱい、やっぱ大きい……」

柔らかに揺れてまろび出たのは、片方だけでもスイカサイズのたわわに実った乳果実たち。練乳のようなまろやかな美肌にベビーピンクの乳首が愛らしい、むっちりとした張りのある膨らみだった。

続いてタルテの細い指がメイド服に伸ばされる。ベストを脱いで胸元を出し、谷間の見える白いブラウスをボタンを外して左右に開く。

——たゆんっ、たむるるんっ。

「うわあ、タルテさんもおっぱいを。こっちも大きい、すごくキレイ……」

波を打つように揺れて出るのはあまりにも柔らかい豊満な果実だ。こちらの乳首はとて

も鮮やかなローズピンクで、自然と男心をくすぐる強い色気を持っていた。

「二人ともステキ。おっぱい、フルーツみたいで美味しそう……」

「た、食べ物ではありませんよっ。み、見たり、触ったりするのは、構いませんが……」

いまだ恥ずかしいのかタルテはパイッとそっぽを向いた。

ティアのほうは、さすがに恥じらいは残るもののかみながらにじり寄ると、重たげなオッパイを両手で持ち上げてペニスに押し付けてくれていた。

「あっ、ティア、ば、パイズリ？」

「うん。ラブ奴隷なティアのご主人様に、いっぱいおっぱいを感じてほしいの……」

「わ、わたくしも、このくらいやってみせますからねっ……」

「ああ、タルテさんまで……!」

ティアと向かい合う形でタルテも巨乳を押し付けてくれる。美人二人を股間にはべらせ左右からペニスを挟み込まれる形になった。

四つの乳房たちがゆったりと愛撫を開始すると、たちまち快い痺れが走って敢は内股を震わせる。

「あ、ああっ……! いい……すご、気持ちいい……!」

すぐにも勃起は反応を始めて、血管を忙しなく脈打たせながら小刻みに震えてエラを広げる。その巨大すぎる立派なものを、しかし四つのたわわな果実は溢れんばかりの量感でもって隙間なく包み込みしごいてくれる。

「ああっ！ はあ、はあ、い、敢う、おちんちん気持ちいい……先っぽからお汁出て、ぬるぬるしちゃう……！」

「んひい……！ お、オチンポ、暴れさせないで……暴れると、ま、ますます……！」

二人もすぐに反応し始めお尻を震わせて眉根を寄せた。そう、普通のセックスと違い、三人は仲良く勃起快楽を共有できるので。

実際、四つのオッパイでのダブルパイズリは普通のそれより格段に気持ちよかった。

ティアの爆乳は張りど弾力に富んでいて、先走り汁をネットリと絡めつつ大きくバウンドしてなめらかに擦る。片やタルテの巨乳はお餅のような柔らかさがあり、纏わり付くような淫猥な動きがいやらしくって刺激的。

おまけに二人は意図的に谷間で乳肉を交差させ、歪んで絡み合う淫らな動きで視覚さえも楽しませてくれた。

「はあ、はあ、す……すごいよ！二人とも、こんなことができるようになってたなんて……！」

「はあ、はあ、くす……敢のためだもん。ラブ奴隷、あんっ、がんばっちゃうんだからあ……んっ、ティア、ファイトお……！」

高まる官能に瞳を蕩けさせ、美少女魔王は腰まで振って爆乳を大きく揺すつてくる。

「はあはあ、ひう……！ ティア、様あ……そ、そんなにしたら、わたくしの、ほうがあ……ひんっ、乳首い当たるう……っ！」

タルテなどはリズムを乱し、唇の端から唾液を垂らして肩をひくひくさせていた。

さらに二人は、お互いの乳首が擦れ合う感触に、より身悶えを大きくしていく。

「っああ、はあ、はあ、あふゆう……！　やあ、タルテの先つちよ、ぴんっ、ってしてる……わたしの先つぽ、あふん、弾いちゃうう……！」

「ティア、だんだんエツチな顔になってきた。気持ちいいんだね？　乳首で感じちゃって」

「やあん、敢の、いじわるう……あ、はあん……」

甘い鼻声で鳴く美少女、その濡れて輝く淡い唇を敢はそっと指でなぞった。全身が敏感になっているらしく、白い首筋が細かく震えて吐息に一層熱が籠った。

「んふゆうん……気持ち、いい……敢、き、キス、してもいい……？　指に、キス……」

「いいよティア、いっぱいキスして。ああ、いい……！」

官能に酔い痴れるように彼女は人差し指を口に含んだ。そのままフェラチオするかのようになく強く吸い付き唇でしごく。唾液まみれの口内からは、たちまちじゅぶじゅぶと淫らかな水音が湧き出していた。

（すごい！　これ、指まで気持ちよくてゾクゾクするう！）

爆乳と巨乳の同時摩擦で十分すぎるほど気持ちいいのに、指の感覚すら快く痺れて少年の背筋がぶるるっ、と震える。今や全身が快楽器官になったようで、射精感はもううなぎ上りだった。

そこへタルテが彼の所有権を張り合うように、

「はあはあわたくしもっ！　わたくしにも指、指をお……！」





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takentí Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトに続々配信中!!